

平成23年12月13日

秩父市議会議長 小 櫃 市 郎 様

文教福祉委員長 江 田 治 雄

文 教 福 祉 委 員 会 行 政 視 察 報 告 書

- 1 期 日 平成23年10月4日(火)～ 6日(木)
- 2 視察先 北海道砂川市、北広島市、函館市
- 3 参加者 委員長 江田 治雄 副委員長 金崎 昌之
 委員 新井 重一郎 委 員 木村 隆彦
 委員 五野上 茂次 委 員 齋藤 捷栄
- 4 視察目的 文教福祉委員会では視察を計画する前に、全員で基本的な視察の是非について協議した。しっかりした目的を待って臨む視察であれば議会活動の一環で必要であると意見がまとまり、北海道の砂川市、北広島市、函館市の3市を視察することを計画した。

北海道砂川市 「砂川市立病院の経営について」

○ 市の概要

北海道のほぼ中央に位置し、東は夕張山系を境に赤平市、歌志内市、上砂川町に隣接した丘陵地帯が続き、西は石狩川を挟んで新十津川町、北は空知川を挟んで滝川市、そして南は奈井江町に隣接した平地地帯が広がっている。東西に約10,5km、南北に約12.7km、総面積は78.8平方kmあり、市街中心部は平地地帯で南北に細長く展開し、中央に基幹道の国道12号のほかJR函館本線や道央自動車道がそれぞれ南北に伸び、豊かな緑と水に囲まれた商工農のバランスがとれた街となっている。

○ 事業の概要

砂川市立病院は、昭和15年に町立社会病院として開設された。現在は新病棟の建設中であった。完成すると診療科目22科、病床数508床の巨大病院になる。特徴として市内における医療需要は限られており、入院患者の約70%、外来患者の約60%が近

隣の市町村からの患者であるとの事。空知（そらち）地域の基幹病院として発展している。質に高い医療を提供することを目指し、充実した病院の健全化に努めている。平成15年から黒字経営を行っている。病院が市を賄っていると報道された事も有り、先進地の事例として視察に値する病院である。



砂川市立病院のヘリポートにて

北海道北広島市 「電子黒板を使った授業について」

○ 市の概要

北海道石狩地域にあり、札幌の南東部に隣接する市である。農村として古くから発展してきたがニュータウンが建設され、札幌都市圏のベッドタウンとして人口が増加、現在約6万人の新しい市である。面積は118.54平方kmである。北広島市の通称は「きたひろ」であり、市では観光・商業に広く使用されている。

○ 事業の概要

平成21年度に、国・道の補助金を活用し、市内小中学校の全教室に261台の電子黒板を導入した。きっかけは総務省が進めた、テレビのアナログはからデジタル放送の切り替えである。市の教育委員会はテレビの買い替えを検討した際に、学校現場ではどの位の頻度でテレビが活用されているかアンケート調査を実施した。その結果、授業にテレビを使っていない事が判明した。実態を見た教育委員会の職員は、費用対効果を考え様々な機能をもった「電子黒板」の導入について研究した。もちろん現場の教職員もメンバーに入れての事である。導入後は教職員も使い方に工夫をし、子供たちもなれてきて、徐々に成果が上がっている。

北海道函館市 「小学校の統合、小中学校の配置の基本指針について」

○ 市の概要

北海道南西部渡島半島の南端に位置し、横浜・長崎とともに日本の国際貿易港として開かれて以来、早くから海外との交流が始まり、近代日本の幕開けを担ってきた。市民の中にも新進的な国際感覚が息づき、長い歴史と文化を有する街である。平成の大合併北海道に第一号として、平成16年に1市3町1村と合併。平成17年に「中核都市」に移行し、国際観光都市としてさらなる発展を目指している。人口は29万5千人。

○ 事業の概要

全国的に少子化が進む中、函館市においても児童生徒数の減少は著しく、小規模校が全市的に数多くなってきた。教育環境にも大きな変化が見られた。このような状況の中で、教育委員会は望ましい教育環境を確保するために、平成16年12月に学校教育審議会に「函館市における市立小・中学校の再編について」諮問し、平成19年に答申を受けた。その内容を踏まえ、再編を進めるうえで基本指針をまとめた。現在、それを基に各地域で関係者と話し合いを進めている。

【職員の取り組む姿勢がカギ 江田 治雄】

北海道3市の視察を終えて感じたことを報告する。4年前、夕張市が財政破綻した。その後、道内の市町村では第二の夕張市にならないために行政はもちろん、議会も真剣に行財政改革に取り組んでいる。今回視察先の3市のそれぞれの職員が、将来を見据えた意識で真剣に業務遂行にあたり、前向きな提案をしているのが非常に印象的であった。特に砂川市立病院の小俣事務局長さんの手腕に驚いた。「病院の経営は働く環境づくり」だときっぱり言い切る。公立病院の大きな悩みの一つに「医師不足」がある。砂川市立病院ではこのような対策として、医療機材の新規導入を自負している。医師は最新医療技術をマスターすべく、最新機材の揃った病院には自然と興味を抱き集まる。ここ数年、医師不足は感じないとのこと。さらに医師が集まることにより、看護師・職員のモチベーションが上がり、非常に良い雰囲気の中で職場が保たれている。医師・職員とのコミュニケーションも図られ、人間関係のトラブルも少ない。したがって、当然その評判が広がり、患者も増えて診療収入が上がり、その結果、利益計上に結び付く。まさに「好循環サイクル」である。すばらしい経営実態を学んだ。

職場はよく「適材適所」と言われるが、専門的分野の人事は定期的な異動でなく、専門職の養成が必要だと感じた。将来、当市でも人事関係について再検討する必要があると思う。我々議員も一度の提案で無く、後の確認や成果チェックが必要と感じた。今後の議員活動に生かしていきたいと思う。

【電子黒板と子どもたちの笑顔 金崎 昌之】

いわゆる米百俵のたとえは、戦に敗れた長岡藩の窮状を見かねて贈られた支援米百俵を当座の生活よりも教育へと振り向けた、藩の大参事小林虎三郎の「百俵の米も、食べばたちまちなくなるが、教育にあてれば明日の一万、百万俵となる」との言葉からきているというが、いつの世においても、次代を担う子どもたちへの配慮は最も優先すべき事柄だと心得ている。

さて、「子は親を写す鏡である」と言われることがある。実際、大人社会のひずみが、いじめや不登校など、子どもたちのくらしに色濃く影響を与えているように見える。そして今、その子どもたちに3・11東日本大震災が追い打ちをかけている。尾木ママこと教育評論家の尾木直樹氏によると、震災以降全国の子どもたちの間に「被災地のみんなが苦しんでいるのに自分はなににもできない」という無力感に伴う抑うつ感が広がっているという。

こうした中、この秋文教福祉委員会の視察で訪れた地に、テレビのデジタル化に伴う国の補助事業を活用して、電子黒板をいち早く導入した北海道北広島市教育委員会がある。視察を通して印象的だったのは、この補助事業を先取りして市内全小中学校に261台・総額2億円余の電子黒板を自主財源1千万足らずで導入したと豪語する担当者の手腕もさることながら、テレビ・インターネット・プロジェクターと実際の黒板とが一体となったこの「電子黒板」を使っている子どもたち（先生も）の本当に楽しそうな姿だった。

とかく生きにくさが増す今日、子どもたちがこうして今時の環境で教室内外のみならず“絆”を確かめ合いながら笑顔で学べるということは、とても貴重なことに違いない。

【「北海道砂川市立病院黒字経営」の視察 新井 重一郎】

多くの自治体病院が赤字経営に苦しむ中、黒字経営を実現している北海道砂川市立病院に視察先としての白羽の矢を立てた。平成23年10月4(火)「砂川市立病院の経営」について関係者から直接話しを聞くことが出来た。病院は昭和15年砂川町立社会病院として開設、昭和43年に砂川市立病院として前面改築された。その後老朽化が進み、H20年に改築決定、H22年10月に電子カルテや最新鋭の医療機器を備えた新病院としてオープンした。病院の概要は、診療科目22科、病床数521床、職員数807名(医師85名、出身大学北大と札幌医大約半々)。1日平均患者数：入院374.4人、外来1,062.1人、合計1,436.5人。病院収支状況：H21年度純利益45,719千円＝病院事業収益9,788,420千円－病院事業費用9,742,701千円。でH20年を除いてH14年度から黒字を続けている。砂川市は札幌市と旭川市の間に位置し、周辺に、砂川市も含めて5市5町を有し、診療圏人口が118,679人、しかし、H23年4月現在の砂川市の人口は18,976人である。H23年度一般会計予算10,503,000(千円、市税19.3%、地方交付税42.9%、国庫支出金10.4%、他)、特別会計5,511,889(千円)、病院事業13,911,062(千円)、合計29,925,951(千円)である。小規模な財政団体の市が、何故、黒字経営を続けることが可能なのか。説明によると、当市の人口は1.9万人足らずだが、入院患者数の70%、外来患者の約60%が近隣市町村患者で占められていて、まさに、地域基幹病院の使命を果たしていること。その上、医師を集めることに苦勞していないという。それは、病院が大学以上の最新鋭設備、医療機器を有していることにあると病院事務局長から説明を受けた。

【北広島市北の台小学校の電子黒板授業を視察して 木村 隆彦】

北広島市ではH21年度の文部科学省の「学校におけるICT(情報通信技術)環境整備」の補助金を利用し小学校10校、中学校7校に電子黒板の整備が行われました。きっかけはテレビのデジタル化でした。検討する中で、学校におけるテレビの利用について調査を行いました。その結果、学校ではオンタイムによる活用はほとんどなくビデオやDVD教材による授業が中心でした。そのためデジタルテレビの需要は少なく、電子黒板を整備するにあたりユニットタイプの黒板電子情報ボードを採用し、プロジェクターとスクリーンにより投影できるようにになっています。通常黒板の半分程度にロールスクリーンを引き出し、天井に吊り下げられたプロジェクターを使用し、音声を出しています。チューナーも整備されているのでテレビの視聴もでき、また、パソコンと連動して、教科書の画像が大きく投影されていました。児童は下を向くことなく黒板に見入って授業を受けていました。また、先生方の独自の教材を使って児童を飽きさせません。視察を行い、感じたことは児童の学力の底上げができていっているように思われます。また、教職員も使いこなすための努力も必要であり、やはり使用することにより効果が表れると感じました。



電子黒板による授業

【文教福祉委員会行政視察報告 五野上 茂次】

私達、文教福祉委員会メンバー6名は、10月4日～6日の日程にて、北海道の砂川市立病院、北広島市役所、函館市役所の計3か所の行政視察を行いました。

- 1、市立病院の経営について（砂川市）
- 2、電子黒板を使った授業について（北広島市）
- 3、小学校の統合、小中学校の配置の基本方針について（函館市）

今回の視察で、特に私として興味を持ち知識を身につけたいと抱き視察に臨んだ内容としては、1番、3番の項目についてです。なぜなら、私達の住む秩父市の将来に避けて通ることのできない内容と思うからです。項目1番については、我がまち秩父市は、定住自立圏構想を進める中、砂川市での診療圏人口が10万人強と、秩父地域とほぼ同環境に値します。定住自立圏構想を進める中、同一診療科目の横を睨んだスライド化、そしてまた、情報の共有化等を推し進め、将来は1本化の道に進むべきと考えます。

次に、項目3番については、平成の大合併により全国は元より、現秩父市においても1市1町2村の合併により県下随一の広大な面積を有する市となり、山間部から旧市内と大変広範囲の地域となり、児童・生徒たちの心の環境も大変変わったと思われまます。函館市を視察する中、規模、立地条件の差はあるものの、避けて通れないことであることは同一だと思えます。地域により歴史と伝統という大きな字がぶらさがっている現状を考えると、そう簡単に解決できることではないが、地域及び父母者の理解のもとに進めたいと思えます。

【度肝を抜く公立病院・・・砂川市立病院 齋藤 捷栄】

私にとって砂川市への視察は、平成18年総務委員会委員として「行財政改革」視察に訪れて以来2度目であった。前回視察時砂川市立病院の存在も知らずに訪れた私は、市役所に隣接して設置された病院の大きさに度肝を抜かれた。その後全国で医師・看護師不足が社会問題となり、様々な病院の対策実態が紹介される中でモデル病院として度々メディアに取り上げられる砂川市立病院に深い関心を抱き、改めて病院視察に訪れてみたいと思いつけてきた。そのような経緯を経ての今回の視察は再び私の度肝を抜くものとなった。

昨年10月に開院した新病院は、敷地面積 19,812.23 m²（約6000坪）、延床面積 53,185.49 m²（約16120坪）、地上7階、塔屋にはヘリポートも有し、診療科目・22科、病床数・521床というこの病院が、人口わずか18,899人（平成23年9月末現在）の砂川市が保有する市立病院であることに驚かない者はないであろう。

この病院と秩父市立病院との共通点・相違はどこにあるのか、例えば診療圏人口について考察すると、秩父市立病院は、秩父地域における中核病院として広域組合圏人口109,273人を診療圏人口とし、一方の砂川市立病院は、中空知地域センター病院として118,679人（平成22年10月現在）を診療圏人口としていることから、診療圏人口上では大きな差異はないことが分かる。公立病院として救急医療等の政策的医療を担っていることも共通している。では相違はどこにあるのか、経営効率化に係る指標（病床利用率・患者1人1日あたり収益等）などの資料分析を初め、様々な角度から検証を進めているところである。